

## <視覚障害>

### ■具体的な差別事例①

発生場所：駅

対象業種：公共交通事業

私は、働き盛りの時に病気で両目の視力を喪失した中途失明者です。視力を無くした当初は絶望に暮れ、外出もできない日々が続きました。しかし『こんなことではいけない』と思い、外出し社会参加するために必要な歩行訓練を受けました。訓練の甲斐あり、頭の中に地図が描ける場所には、白杖を使って一人で外出できるようになりましたが、道路に障害物がないか、人にぶつかることはないかなど、不安な気持ちを抱えながら、そろそろゆっくりと歩くことに不満を少しずつ感じるようになりました。

そんな日々を送っているときに、盲導犬が県から給付される情報が耳に入ってきました。盲導犬のことは以前から知っていましたが、盲導犬がいれば障害物はよけ、段差や曲がり角にあれば止まってくれるので、白杖を使った歩行よりも、はるかに安全にさっそうと歩くことができると思い、迷わず市役所の窓口で給付の申請をしました。それから約5カ月後に、私と盲導犬の生活が始まりました。

盲導犬はもちろん、私が行きたいところが分かっているわけではありません。私が目的地までの地図を頭の中に描き、耳に入る様々な音や道路の形状から周囲の情報を得て、盲導犬に指示を与えることで、目的地まで私を安全に案内してくれるのです。盲導犬は私にとって掛けがえない存在です。

そんなある日、視覚障害者の会議に出席するため、盲導犬とともに列車に乗って、会場に向かった時のことでした。会場の最寄り駅で私が列車を降りると、私と同じ駅で降りて、私に声を掛けてくる（恐らく）男性がいました。「帰りもここから列車に乗られますか。」と尋ねるので、「はい、目的地はこの駅から歩いて1~2分なので。」と答えたと男性は「ここは無人駅なので、帰りは隣の駅員がいる駅から乗ってもらえませんか。」と言いました。「私は何度もこの駅から列車に乗り降りする訓練をしていて、慣れているので大丈夫です。」と答えても、「無人駅でホームから落ちて、事故になったら大変なことになる。」と譲りません。あまりにしつこく言うので、頭にきた私は、「何の権利があってあなたは私にそんなことをいうんですか。」と聞くと「隣の駅員だからです。」と答えました。「では、隣の駅から乗るので、帰りにあなたが迎えに来てくれるんですか。それともタクシー代かバス代を出してくれるんですか。」と言うと、「それ

はできません。」というので、「では、私もそれはできません。駅員であるあなたが、盲導犬とそれを連れている私を乗車拒否されるということですね。これは私たちに対する重大な差別です。本社に厳重に抗議させていただきます。」と言い残して、会場に急いで向かいました。

会議が終わっても怒りが収まらない私は、行きと同じ無人駅から列車に乗り、自宅に着くと休む間もなくパソコンの前に座り、抗議の準備に取り掛かったのは言うまでもありません。

## ■具体的な差別事例②

発生場所：飲食店

対象業種：飲食業

視覚に障害のあるAさんが、外出するときにはいつも盲導犬と一緒にいます。ある日Aさんと友人2人（ともに健常者）が、商店街で買い物をした後、同じ商店街の中にあるランチが美味しいと評判の飲食店で、昼食をとることになりました。Aさんが盲導犬とともに飲食店に入ろうとしたところ、店員は盲導犬を見て戸惑った様子で、「しばらくお待ちください。」と言い残して、店の奥に消えていきました。店主と相談してきたのか、しばらくして戻ってきた店員は、「他のお客様に動物アレルギーはないか聞いてきますので、もうしばらくこちらでお待ちください。」と言いました。Aさんと友達は、「不特定多数の人が利用する店舗では、障害者補助犬の入店を拒んではいけないことになっているのに、知らないのですか。」と詰め寄りましたが、その言葉を聞き入れず店員は、各テーブルを回り始めました。戻ってきた店員は、「お客様の中に犬の苦手なお客様がおられます。あと5分程度で食事が終わり、帰られますのでもうしばらくこちらでお待ちいただくか、本日はテラス席でもよろしいでしょうか。また、昼の時間はお客様が多く、混雑しますので、次回からは12時から13時ごろの昼食時は、避けていただけますか。」と言いました。買い物でたくさん歩きお腹のすいていた3人は、希望していた店の中ではなく、仕方なく中庭のテラス席で食事をしました。ランチは評判通り美味しく、友たちとのおしゃべりも楽しかったけど、盲導犬についてまだ十分に理解されていないことに、淋しいような、残念なようなすっきりしない気持ちで店を後にしました。